

1979年から5年間、1998年から17年間の2度にわたる通算22年のインドネシア勤務を終え昨年3月に帰国しました。

インドネシアにおけるソフトテニスの歴史について振り返り、今後の問題点と課題について考えてみたいと思います。

1. インドネシアソフトテニス協会 (PESTI) 設立 (1988年)

*1988年、アジア大会へのソフトテニスの公式競技入りを目指す日本ソフトテニス連盟 (JSTA) がお膝元の東南アジアでの普及を目的に各国で技術指導と組織確立を実施し、インドネシアソフトテニス協会(PESTI)を設立してインドネシアのNOCに加入。

会長 : Mr. Abdur Gafur (スハルト大統領時代の文部大臣)

*主要イベント

世界選手権 : 1991年ソウル、1995年岐阜、1999年台北

アジア選手権 : 1992年ジャカルタ、1996年バンコク、2000年佐賀

アジア大会 : 1994年広島で初めて公式競技となり、インドネシアも参加。

*1998年のスハルト退陣以降も会長をつとめていた Mr. Abdur Gafur が 2002年に会長を辞任、NOC加入必要条件の「34州中10州以上での実態活動」が満たされていないことが露呈、PESTIがNOCから脱退させられる。

2. PESTI 会長不在の下野時代 (NOC 脱退)

*私は2002年初めから普及活動に参加、日本ソフトテニス連盟(JSTA)の支援を得て、国際試合への参加とインドネシア各地での普及との両面から活動。

*主要イベント

世界選手権 : 2003年広島 Mr. Gularso + Mr. Wisno がベスト16、2007年韓国

2006年プレ世界選手権 (韓国) Mr. Ferly 金メダル獲得

アジア選手権 : 2004年タイ

Mr. Edi が3年間無敗の韓国人世界チャンピオン方峻煥を破る大波乱

2008年韓国

アジアカップ広島 : 2005年初参加 (1994年アジア大会への公式競技入りの記念大会)

東南アジア選手権 : 2002年から2年に1度タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアで順次開催。常に獲得メダル数最多。

中山杯 (台湾) : 2005年から参加 Mr. Ferly + Mr. Ferdy 銅メダル獲得

国内の普及活動 : ジャワ、ボルネオ、スラウェシ、バリの各地で実施。

*2004年、Mr. Emirnya Satar が会長に内定したが、ガルーダ航空社長に就任し多忙のため実現せず。

3. テニス協会の傘下で NOC に再加入

*2010年、念願のアジア大会参加を目指して、テニス協会(PELTI)会長に PELTI 傘下での NOC 加入を直訴。

たまたま 2011年に SEA Games (アジア大会東南アジア版) がインドネシアで開催予

定で、金メダル獲得の可能性を聞かれ、5個獲得を保証し加入を認められる。

会長：Mrs. Martina Widjaja (PELTI 会長) 絶大な支援を得る。

*2011 年第 26 回 SEA Games

土壇場でのラオス参加で必要参加国数達成に成功、初めて公式競技として認められた。国の金メダル獲得作戦の全面的な支援を得て、日本からコーチ、国体選手を2度招聘し合同強化練習を実施、下記の各種国際大会に参加してレベルアップを図った。

アジアカップ広島、中山杯（台湾）、中国カップ（広州）、ポーランドオープン。

世界選手権（韓国）の女子シングルスでは Ms. Wukir が銀メダルを獲得。

また、ガルーダ航空の協賛でインドネシアオープンを開催、日本、韓国、台湾を招聘。

結果：7 種目の金メダル独占の快挙を達成。

（男女シングルス・ダブルス、混合ダブルス、男女団体戦）



中央列右から 2 番目が Mrs. Martina Widjaja

2013 年（ミャンマー）、2015 年（シンガポール）は当時の開催国にソフトテニスプレーヤー不在のため、競技種目からはずれる。

2017 年のマレーシアはボルネオ島のサバ地区で盛んであるが、NOC に未加入で、海外から加入支援が必要、2019 年フィリピンはソフトテニス協会の会長 Mr. Tamayo が NOC 副会長なので問題なし。

4. 新 PESTI を設立、ソフトテニス単独で NOC メンバー(2013 年)

*PELTI の Martina Widjaja 会長が任期満了の退陣後、後任会長の支援が得られず、2012 年 2013 年は活動低調。この状態から脱出するため、10 州での組織を再編して新 PESTI を設立し、ソフトテニス単独で NOC に再加入。

会長：Mr. Martuama Saragi（会計検査院の幹部）

*2014 年のアジア大会

2011 年の SEA Games での金メダル独占が評価され、2014 年のアジア大会への参加が認められる。1994 年以来 20 年振り 2 度目の参加。

結果

男子シングルス：Mr. Edi が銀メダル獲得

混合ダブルス：Mr. Prima + Ms. Maya が銅メダル獲得



*世界ジュニア選手権（Ahmedabad, India）に初めて参加

5. 2016年以降の予定

*2016年アジア選手権

インドネシアで開催することが内定していたが、2018年にインドネシアで開催されるアジア大会に備えて施設を改修するため、予定していたコートが使用できなくなり、開催が不可能となるという予想外の残念な展開となった。JSTAで他の国を検討。

*2018年アジア大会

2019年開催予定であったベトナムが財政問題で降りたため、急遽2018年に繰り上げてインドネシアで開催されることになった。

ソフトテニススマトラ島のパレンバンが予定。

6. 今後の問題点と課題

*インドネシア人の気質

インドネシアには「ババ・アンカット」という言葉がある。

力（お金）のある親分（パパ）が力のない人の面倒をみるのが当たり前、力のない人はある人に面倒を見てもらうのが当たり前という考え方である。

インドネシアのソフトテニスの場合、Mr. Abdur Gafur（大臣）、Mrs. Martina Widjaja（実業家）がパパの役割を果たしていただき、強力な支援を得た。

現会長は会計検査院の役人で国のスポーツ界に人脈があり期待したい。資金力なし。

また、「ジャム（時間）・カレット（ゴム）」（時間に遅れるのが当たり前）という風土で、集合時間や締切り時間を守らない、計画的な進め方ができないのには悩まされた。

* 士気の鼓舞、継続のためのスポンサー確保

4年に1度のアジア大会、2年に1度のSEA Games開催の年は国を挙げての行事となり、遠征旅費や手当（メダル獲得の場合は多額の賞金）を出してもらえるから大いに盛り上がるが、その他の年のソフトテニス単独の試合の場合はその都度スポンサーを探すのが困難で活動が低調になるという状態が繰り返されている。

熱し易く冷め易い選手達の士気を鼓舞し、活動を常に活発化、継続化させるためには、安定したスポンサーを確保し、国際大会参加の機会を継続的に作る必要がある。

* 人材発掘と育成

今回のSEA Games、アジア大会のメンバーは全て硬式テニスからの転身で、男子5人中3人は元デビスカップ選手（1人は1975年生まれ）、女子5人中3人は元ツアープロ、運動神経、反射神経に恵まれた経験豊富な選手達であるが、2018年アジア大会以降を引継ぐ若手選手の発掘と育成が課題。

SEA Games、アジア大会でメダルを獲得してソフトテニスの知名度が向上した機会に全国34州にソフトテニスを普及させて底辺を拡大し、日本の国体相当の大会(PON)でソフトテニスを公式競技として公認申請することを計画中で、支援していきたい。

最後に、日本ソフトテニス連盟で絶大な支援をいただいた慶應義塾OBの西村副会長、内藤さん、丹崎さん、玉木さんと青山学院OBの笠井専務理事に感謝します。